



くすりと健康

一般社団法人
神戸市薬剤師会

パーキンソン病

パーキンソン病は、脳から筋肉への指令がうまく伝わらずスムーズに動くことができなくなる病気で、脳の中にある黒質神経細胞が変性し減少することが原因です。この黒質神経細胞は脳から筋肉へ指令を送る際に必要なドパミンという神経伝達物質を作っており、黒質神経細胞が減少しドパミンの分泌量が減ることによって、脳と筋肉をつなぐ神経の伝達がうまくいかず、筋肉を「コントロールしにくくなり」ます。黒質神経細胞が減少する原因は、完全にはわかっていませんが、50歳代以降に発症することが多く、その進行はとてむつくりです。ただ、現在のところ根治させる治療法はありません。

パーキンソン病は、手や足がふるえる「振戦」という症状が現れることで初めて気がつくことが多く、左右どちらかに起こります。この症状は、何も

していない時に現われ、何かしようとすると止まるので、日常生活を送る上であまり不便を感じません。症状が進むと、この症状は両方の手や足に起こるようになります。ほかの症状は、「固縮」(筋肉がこわばり、手首などを動かすとカクカクした動きになる)、「無動」(ゆっくりでぎこちない動きになり早く歩けない)。まばたきが少なく表情が乏しくなる、「姿勢反射障害」(バランスがとりにくくなり、膝を曲げて少し前かがみの姿勢で立ちまわることがあります)。

パーキンソン病の治療の基本は薬物療法で、足りなくなったドパミンを補うことで症状が改善します。主な薬は、脳内でドパミンに変化する薬(レボドパ)や、ドパミンの作用を高めたり、ドパミンを出しやすくする薬などがあり、年齢や症状、患者さんの状態にあわせて薬を使い分けたり、数種類を組み合わせて使ったりします。

レボドパはとても効果があります

が、1日のうちでも効果が変動することがあったり、長期間服用していると効果が下がってきたり、無意識に体が動いてしまう副作用があります。そのため、レボドパの使用量を減らし、効果の変動や副作用を起こりにくくする目的で、M A O B 阻害薬というドパミンが分解されるのを抑える効果のある薬やC O M T 阻害薬というレボドパが分解されるのを防ぐ薬などと一緒に使われることもあります。

ドパミンの作用を高める薬は、ドパミン受容体刺激薬があり、脳からの指令を受け取る神経細胞の動きを活発にして症状を改善します。薬の服用を始めてから効果が現れるまでに少し時間がかかりますが、レボドパより効果は安定しています。副作用は吐き気や食欲不振のほか、突然眠ってしまうことがあるので自動車の運転や危険な機械作業などをすることは避けてください。

(北区) 薬局エビラファーマシー

松本 博志